

なぐ

米作りの現場から

親から子へ

親 かのうはんしろう 加納半史郎さん(左)と

子 けんいちろう 健一郎さん(右) (川原)



農業は食を守るため、また、自然や景観を守るために重要な役割を担っています。一方で、後継者不足や米価の下落など農業経営を続けていく上で大きな課題を抱えています。日野町でも就農を含めた後継者の育成や耕作放棄地の増加が問題となっており、昭和40年に3,261件だった農家数が平成2年には2,098件、そして平成22年には1,309件にまで減少しています。今回は、さまざまな問題や課題を抱えながらも農業を守り、次の世代に農業をつないでいくために活躍されている方々をご紹介します。

加納健一郎さんが本格的に農業を始めたのは5年前。勤めていた会社を退職し、専業農家への道を選びました。

現在、親子2人で約28haもの田んぼを管理されています。親から子へ受け継がれる農業。そこには苦勞も楽しさもあります。

農業を継ぐきっかけ

「小さいころから田んぼが身近にあって、田んぼでの作業が遊びでした。いきいきと農業をしている父を見て育ち、農業を継ぐことは前から決めていました。今思えば恵まれた環境に生まれてよかったと思います」と健一郎さん。

「農業を継いでくれたらという思いはありました。でも息子の人生なので強制はしたくなかった」と父の加納半史郎さん。

健一郎さんは、1年間半史郎さんから農業を学び、現在ほぼすべての農作業や経理を任されているそうです。

作物への思いやこだわり

健一郎さんは農作業中、作ったお米を食べてもらう時のことを思い浮かべ、作業されています。食べる人のことを考えると、なるべく農業を使わず、安心で安全なものを作ろう

という努力につながるそうです。

現在お二人が作るお米は、農薬の低減等環境へ配慮した「環境こだわり米」がほとんどです。健一郎さんは、「思いを込めて作っているの、いろんな人に食べてもらいたい。日野町は生産者と消費者が近いので、地元で取れたものを食べてもらいたいです」と語られました。

農業をつないでいくために

半史郎さんは、「農業は作物が育つていく姿を見ることができ、やりがいのある仕事。農業をつないでいくためには、子どもころから農業の良さを味わうことが大事です」と、まず自分が農業を楽しむ大切さを語られました。

また、「楽しさを伝えるためには、おもしろい作業（田植え機での田植えやトラクターで田を耕す作業など）を若者に任せることも必要。草刈り等だけ任せようとしても楽しさが伝わりません」とも語られました。

普段の生活の中で忘れてしまっている雨の恵みや、自分で作ったものを味わう喜び。おふたりは、農業ならではの魅力を味わい、農業を楽しむことを大切にされていました。

農業をつ

子どもたちへ

田んぼの子体験事業



桜谷小学校

農業を通じて食を学ぶ

田んぼの子体験事業は、子どもたちが地元の方とふれあい、農作物を「作り」「育て」「収穫し」「食べる」ことを体験する事業として平成14年から実施しています。町内すべての小学校で行われ、5月上旬には、それぞれの学校で田植えが行われました。

桜谷小学校では、地元の吉沢啓藏よしかげ けいざうさんの田んぼで、吉沢さんをはじめ地域の方や祖父母の方の指導を受け田植えをされました。子どもたちは、素足で田んぼに入り、「又メ又メする〜」と土の感触にびっくり！中には足をとられて、転んでしまう子どももいました。

指導をされた地域の方は、「家に田んぼがあっても実際、土の中に入る機会は減っています。自分たちで植え、育ったものを刈り、調理をするという体験は大切です」と話されました。

桜谷小学校は、全校生徒が農業体験しており、何度も経験した上級生が下級生に教える姿も見受けられます。名坂利夫校長は「自分が作った作物を自分で調理し、食べるという一連の流れの中で、食の大切さを学ぶ」ことを大切にされています。

南比都佐小学校では、地元の曾羽そへ松司さんしんじ（深山口）の田んぼで田植え、観察、稲刈りを体験しています。



▲田植えをする南比都佐小学校の皆さん

田植え作業では曾羽さんをはじめ地域の方が指導をされました。田植えを始める前、曾羽さんは子どもたちにお茶碗一杯分は約2,400粒あり、そのお米を作る大変さをお話され、子どもたちは普段食べているご飯のありがたさを実感していました。

必佐小学校では、寺澤清穂さんてらさわ しみほ（三十坪上）の指導により、もち米の作付けをし、収穫後にはお餅もちやあられ作りを体験しています。田植え作業後は寺澤さんが田植え機を使った作業を見せられ、子供たちは「すごい早い！」と驚いていました。

みんなで頑張る

農業組合法人 ました



集落の田は集落で

農事組合法人ました（石山史郎代表理事）は、平成24年1月、地域の田んぼを皆で管理し、農業から地域を活性化させていこうと設立されました。営農組合が法人化されたのは、日野町で別所地区に続き2例目です。現在、農事組合法人には増田地区全世帯43戸のうち、31戸が加入され、麦や大豆を中心に作付けされています。増田地区には、法人と個人の努力により耕作放棄地がありません。すべてが管理された田んぼです。それは、法人の目的である地域の田んぼは皆で守るということがこの地域に根付いている証拠でもあります。

全国的に農業の後継者不足が叫ばれています。増田地域も例外ではありません。そのような中でも水稲はなるべく個人で管理するということが重点を置かれています。歳をとってできる作業が少なくなってきたり、個人でできる範囲は個人で頑張る。そして、どうしても作業ができなくなった時には法人で頑張る。最後の最後に安心して頼ってもらえる組織として「農事組合法人ました」があります。



女性の活躍

▲よもぎ餅づくり（JAグリーン近江の田植えツアーにて）

増田地区は、女性が活躍する場も大切にされています。理事の方は「近年、農業が機械化され、どうしても女性が活躍される場が少なくなってきました。機会を見つけて女性が活躍していただく場を確保する。農業にも女性の力は必要です」と語られました。

5月12日（土）には、JAGグリーン近江主催の田植えツアーの受け入れをされました。地域で取れたヨモギを使ったよもぎ餅や、組合で作った味噌を使った味噌汁など、増田地区ならではのおもてなしをされ、参加された方は「地域の方が温かく迎えてくださるので毎年楽しみに来ています」と話されました。

棚田を守る

棚田ボランティア（熊野）



▲棚田ボランティアの皆さん

熊野地区では、平成20年から棚田ボランティアの受け入れをされています。近年、稲作をされる農家が減り、耕作される田んぼも減少傾向にあります。特に、棚田については、機械の利用が難しく、平地の田んぼより手間がかかることから事態は深刻です。そのため、ボランティアで田植えや稲刈り等の作業していただく方を募集し棚田を維持されています。今年5月12日（土）にボランティアの皆さんと田植えをされました。ボランティアの方は、地元の方の指導のもと楽しみながら作業をされました。作業後は用意されたカレーライスを食べながら交流を深められました。

働く喜びを

わたむきの里作業所



働く中でたくましく

わたむきの里作業所（酒井了治施設長）は、作業所に通所されている方7名で農業班を編成し、環境への負荷を減らし、人と自然にやさしい安心安全な農業を目指して米作りをされています。1.5haから始めた事業も、現在は4.3ha。きれいに管理された田んぼを見て、農地をお持ちの方から「ぜひ作付けして欲しい」と広がっていったそうです。

わたむきの里は通所時間の関係で、真夏の炎天下や雨の中でも作業をされます。そのような状況でも作業ができるのは、利用者の皆さんが働くことの喜びを知っているからです。食べられた方の「おいしい」という声、家族が自分の作ったお米をおいしそうに食べている姿、販売先で自分の作った商品を手に取り買われた時の喜び。利用者の皆さんは何より人に喜んでもらえるということに喜びを感じておられるそうです。

安心安全なお米のために

わたむきの里さんは、安心安全なお米づくりに力を入れていらっしゃいます。酒井施設長は「田んぼが広大なため、田んぼの草刈などの作業は大変です。楽しそう



▲皆さん協力して田植え作業をされます

と思えば除草剤を使うなど方法はたくさんあります。でも私たちは手間を惜しまず農薬を減らすことを優先したい」と語ってくださいました。

また作業をされている皆さんは、「外で体を動かすことが楽しい」「自然に囲まれた中で田んぼの景色を見ることが楽しい」と農業の楽しさを語って下さいました。その言葉通り利用者の皆さんはのびのびと農作業を楽しみながら働かれています。

水源を支える

琵琶湖森林づくりパートナー協定



滋賀県では、水源の森林と下流域の企業の支援とをつなぐ「琵琶湖森林づくりパートナー協定」の取り組みを進められています。この取り組みは、企業は森林づくりの費用や労働力を提供し、森林所有者は活動場所の提供、森林整備の実施をするというものです。

このたび、日野町で3か所目となる協定が、竜王町にある株式会社谷口工務店と鎌掛生産森林組合および鎌掛運営会との3者間で締結されました。

この協定により、今後5年間、3者が協働して水源の森林づくりを進められることとなり、今回は、企業からの資金提供により、正法寺山（約13ha）にて、間伐作業や枝打ち、下草刈などの森林整備を実施されます。



▲琵琶湖森林づくりパートナー協定調印式
4月23日滋賀県公館にて